様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 8 日現在

機関番号：32506
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19330109
研究課題名（和文）ライフコース・社会的ネットワークの実証分析―歴史的視点から―
研究課題名（英文）Life course and social network from a historical perspective: An empirical analysis

研究代表者
黒須里美　(KUROSU SATOMI)
麗澤大学・外国語学部・教授
研究者番号：20225296

研究成果の概要(和文)：近世から近代移行期の 200 年に着目し、人口史料を利用することから、徳川庶民のライフコースと、社会的ネットワークについて、そのパターンと要因の解明をめざした。第一にイベントヒストリー分析を利用し、都市と農村における死亡・結婚・離婚・再婚・出生の要因構造を多層的・多角的に明らかにした。第二にネットワーク分析の方法を世帯間の結婚形成に応用し、社会階層や地理的条件とともに親族ネットワークの重要性を示した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the dynamics of life-course and social network among commoners in eighteenth and nineteenth century Japan using population registers. First, event history analysis revealed patterns and factors related to mortality, nuptiality (marriage, divorce and remarriage), and fertility in both urban and rural context. Second, the result of social network analysis uncovered the importance of kinship, together with social and geographical homogamy in marriage formation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
総　計	5,000,000	1,500,000	6,500,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：歴史人口学、ライフコース、イベントヒストリー分析、世帯、ネットワーク分析、結婚、死亡、飢饉

１．研究開始当初の背景

18 世紀の日本は、家族による集約農業、直系家族（長子相続・継承）、そしていわゆる「皆婚」制度が体系化してきた時代とされる。人口停滞と増加、飢饉による影響を経験した徳川後期の日本の家族構造と人口構造のパターンをつかみ、その地域性と時代性を明らかにすることは、日本社会の伝統的な姿を明確にし、現代まで影響を及ぼす家族と結婚システムの立脚点を明らかにすることにもつながるという着想でスタートした。特に研究代表者と連携研究者がかかわってきたこれまでの人口史料構築の成果と多変量分析の手法を応用して、地域性や時代的変遷をシステマティックに探求し、「東北日本型」「西南日本型」というような単純な二元論を超える詳細な分析をめざしたのが本研究である。

２．研究の目的

本研究は、近世から近代移行期の 200 年に

着目し、徳川期の人口史料を利用することから、庶民のライフコースと、社会的・地理的移動を中心とした社会的ネットワークについて、そのパターンと要因を実証的に解明することを目的とした。またこのような徳川期の体系的実証研究を可能とするために、人口史料データの入力とデータベース構築の拡充を図ることを目的とした。

３．研究の方法

麗澤大学・人口・家族史研究プロジェクト室を研究･データベース構築の拠点とし、以下の 3 本柱を中心に進めた。

(1)史料整理とデータ構築作業：ライフコース分析、ネットワーク分析を可能にすべく、宗門改帳・人別改帳を中心とする史料整理とデータベース構築を行い、分析のためのフラットファイルを整備した。オリジナル史料との突合せチェックやデータベース構築については研究協力者・高橋美由紀（立正大学･経済学部）のサポートを得て進めた。

(2)ネットワーク分析：社会学のネットワーク分析の方法を家族・世帯形成に応用し、結婚・養子縁組による社会階層的移動、地理的移動を明らかにすることから、社会的ネットワークの広がりについて考察した。

(3)ライフコース分析：結婚・出生・移動・死亡などの人口学的イベントについて、形式人口学的分析やイベントヒストリー分析を用い、そのパターンと要因構造を多層的・多角的に明らかにした。これらについて都市と農村、農山間、また地域・社会・時代による比較をめざした。

４．研究成果

(1) 史料整理とデータ構築作業

①福島県の農村と在郷町の人別改帳を中心とするデータベース構築と分析のためのフラットファイルを整備した。当初は他の地域についても本作業を進める予定であったが、史料や入力形式の違いから SQL を利用した変数作成が難航したため、本研究では福島県の史料が中心となった。

②これまでのライフコース研究は残存史料とそのデータ構築の状況から農村中心となっていた。本研究ではその比較研究のベースとなる都市人口の整理と入力を進めた。播磨国加古郡高砂 21 カ町村(1831-71 年)、肥前国彼杵郡長崎桶屋町(1742-1864 年) 約 1,150 世帯中約一割の試験的入力を行った。これらは分析に利用するまでには至らなかったものの、本作業によって移動の多い都市人口の実態や世帯分析に重要な続柄情報判定の問題点が明確化した。分析対象とするリスク人口の扱いや、センサリングについて、農村データ分析とは違うアプローチと注意が必要であるという課題を明らかにすることができた。

③ネットワーク分析のために、武蔵国多摩郡明治 3 年戸籍データを拡充し、フラットファイルを作成した。ネットワーク分析は従来の歴史人口学研究では活用されていなかった方法であり、この分析の専門家の協力を得、世帯を単位とした世帯間のつながりのファイルを構築した。さらに他地域における同様の構造をもつデータを構築すべく 1860-70 年を中心とする美濃国 32 郡の入力とチェックを行った。

(2)ネットワーク分析

明治初期多摩地域の史料（35 ヶ村）を利用し、「ネットワーク分析」の結婚形成への応用を試みた。単年の史料であるものの、30-50 年までさかのぼることができる婚姻関係情報を利用し、全観察世帯の結婚可能なペアをリスク人口として実際のペア形成の確率をみる本アプローチの斬新さが認められ、雑誌論文(査読付)として発表した。

分析結果は、世帯が同じ社会的階層に属していること、地理的に近接していること、親族関係があることが新たなる結婚形成に重要であることを示した。まず、結婚形成は二つの世帯の持高の差が少ないほど、また村役人同士の世帯で確率が高かった。持高の差異だけではなく、世帯ペアの持高が高いほど結婚形成の確率が高いという結果は、社会階層の高いほうで、より同質的結婚形成がされていたということを示す。次に、地理的要因をみてみると、やはり、同村内の結婚形成傾向があり、村外から嫁婿をとったとしてもより近場が好まれていたことがわかった。最後に、これらの社会階層的･地理的条件などをコントロールしたうえでも、結婚形成における親族ネットワークの影響があることを実証的に確かめることができた。つまり、過去に一度でも婚姻関係を結んでいた（親族関係のある）世帯ペアは、そうでないペアよりも新しい結婚形成の確率が高かった。親族関係が結婚形成に重要であるというこれまでの家族社会学の知見や事例研究を統計的に検証したことになる。

これまで人口史料を利用した結婚の分析は数多くあるが、結婚市場やパートナーセレクションについての研究は史料上の問題から難しいとされてきた。1870 年日野宿組合内の 35 ヶ村を含むデータとネットワーク分析を利用することで、本研究はこれまでの婚姻研究の制約を打ち破ったといえよう。パートナーセレクションの研究がさかんな西欧に

おいてさえ、すでに結婚関係ができあがったカップルをベースにその属性の特質を明らかにする研究が多い。それゆえに、世帯間のネットワークが新たな結婚関係の成立にどう影響するかという、リスク人口全体を対象とした本アプローチは、パートナーシップ研究の盛んな西欧の歴史人口学の分析をも乗り越えるものである。本分析の長期ミクロデータへの応用が今後の課題である。

(3)ライフコース分析

形式人口学的分析やイベントヒストリー分析を利用し、福島県の二農村の死亡分析の研究成果をベースに、そのアプローチを他地域に適用し、比較分析を試みた。歴史人口学データにイベントヒストリー分析を応用する手法はここ数年に発展してきたものである。その先鞭をつけたのがユーラシアプロジェクト（「ユーラシア社会の人口・家族構造比較史研究」速水融を代表として平成 7～11 年度に実施された文部省科学研究費創成的基礎研究）中に、本研究代表者と連携研究者の津谷典子によって行われた国際比較研究（Eurasia Project）である。本研究は、Eurasia Project における死亡分析をベースに、その分析方法を出生、結婚、離婚、再婚というライフコース上のイベントに応用すること、日本国内の他農村や町場に展開すること、さらに Eurasia Project の他社会との比較へ発展させることをめざした。以下にその成果の概要を報告する。

①人口変動：図 1 は、福島県の純農村である二農村（下守屋･仁井田村）に加え、町場

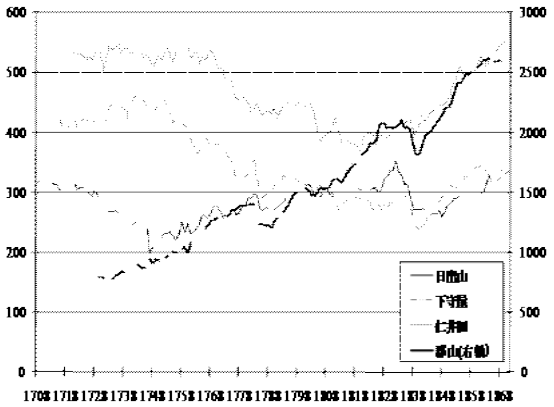

図1. 二本松藩3農村と在郷町の人口規模の推移 1709-1870年

（郡山上町）、そして郡山上町から 3km ほどの街道筋にある農村（日出山村）を含めた史料を利用し、人口の長期的変遷を比較している。同じ二本松藩内にありながら、飢饉からの回復に大きな違いがあった。

18 世紀から 19 世紀始めにかけて、天明・天保飢饉等の打撃をうけ人口が減少した太平洋岸東北地方にありながら、郡山上町は、飢饉時を除き、常に人口が増加していた。街道筋にある日出山村も、他の農村の変動よりは、郡山町のパターンに近い。より詳細な出生率･死亡率･移動率の分析から、町場、および町場に近い農村の人口増加は、人口流入による社会増加であり、自然増加に関しては農村的要素が濃いことが明らかになった。

②生命表分析・イベントヒストリー分析による比較：死亡・結婚・再婚のパターンと決定要因についても、福島県を中心とした町場と周辺農村のシステマティックな比較を試みた。ここでは、「結婚」を中心とした三農村と在郷町の比較分析の例を報告する。

人口の長期的変遷の差異と同様に、町場と周辺農村では未婚率や初婚年齢に大きな違いが明らかとなった。SMAM(Singulate mean age at marriage)による初婚年齢は、男女とも町場で高く、街道沿いの日出山村、続いて純農村である下守屋･仁井田村となる。男女ともに郡山町と二農村では 3 歳の違いがある(表 1)。45-49 歳時までに結婚の経験があるかどうかを示す生涯未婚率(表 2)によると、男女ともに下守屋村で一番低く、郡山町で一番高い。しかし、同時代の西欧諸国の事例と比較してみるとこの違いは大きなものではなく、徳川後期日本の庶民にはだれもが一度は結婚を経験するという皆婚慣行が農村においても町場においても浸透していたといえよう。

表 1　平均結婚年齢の比較：1709-1870 年

	男性	女性
下守屋村	18.1	14.3
仁井田村	18.2	13.1
日出山村	19.6	16.1
郡山上町	21.8	17.9

表 2　生涯未婚率の比較：1709-1870 年

	男性	女性
下守屋村	3.2	0.3
仁井田村	5.2	0.8
日出山村	5.3	0.8
郡山上町	5.4	1.8

結婚パターンの違いは、生命表分析によってより鮮明に描き出される。図 2 は郡山上町と二農村（下守屋･仁井田村）について Kaplan-Myer 法による結婚の生命表を男女別に示したものである。年齢ごとに結婚していない割合が描かれている。二農村の女性は多くが 14 歳前後で結婚し、17 歳になるまでにはすでに 8 割が結婚していた。これに対して郡山女性の場合は、二農村の男性のパターンと同じような線を描いているのが印象的で

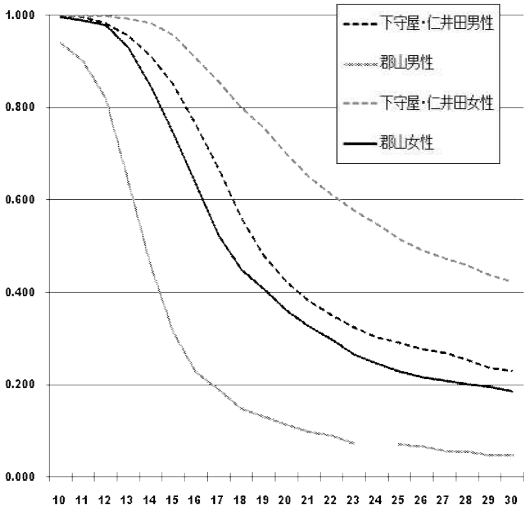

図2　生命表分析(Kaplan-Myer)による男女別結婚パターン:
下守屋・仁井田村vs.郡山町1716-1870年

ある。郡山男性の結婚のスタートはさらに遅く、25 歳でやっと 5 割の男性が結婚を経験していた。

しかし、このような、結婚パターンの大きな違いにもかかわらず、結婚の決定要因には共通性があることがわかった。表 3 は離散時間モデル・イベントヒストリー分析の男性の結果について下守屋・仁井田村と郡山町を比較したものである。米価の変動でみた地域経済が厳しい（米価の高騰）状況で結婚は遅れる。逆に持高でみた世帯の社会経済的レベルが高いほど、結婚確率は高くなる。社会経済的地位の低い無高層を基準とすると、農村でも町場でも、中・上層は 1.4 から 2.4 倍も結婚する確率が高くなっている。経済的要因のみならず、同居家族も重要であり、両親が同居していた場合、両親が同居していない場合と比べて男性の結婚確率は農村で 2.4 倍、郡山上町で 1.5 倍にあがった。これは、両親が息子の結婚に与える正の影響力を示している。女性の場合（表省略）、同じような影響が婿とり婚でみられた。つまり、跡とり娘や息子にとって、両親の存在はその結婚に非常に重要であったといえよう。さらに時代的変化は農村でも在郷町にも見られ、幕末に近づくにつれていわゆる晩婚化が進んでいた。特にその傾向は農村も町場も女性において強いこともわかった。

結婚について行ったこのような多変量分析を、離婚、再婚、死亡、出生についても行い、これまでの記述統計からは伺い知ることのできなかった庶民のライスコースとその決定要因が描きだされたことは、本研究の大きな成果といえよう。また、農村と在郷町の結婚パターンに大きな違いがあったにもかかわらず、結婚の決定要因については共通性が多くみられた。

表 3　結婚の離散時間モデル・イベントヒストリー分析(男性)：下守屋・仁井田村 vs.郡山町 1716-1870 年

	下守屋村 仁井田村		郡山上町	
	exp(b)	*p*	*exp(b)*	*p*
会津米価	**0.673**	**0.013**	**0.716**	**0.050**
世帯持高				
無(reference)	1.000		1.000	
中	**1.371**	**0.062**	**1.382**	**0.000**
高	**1.791**	**0.002**	**2.396**	**0.000**
親の有無				
両親	**2.392**	**0.000**	**1.485**	**0.000**
父のみ	**1.424**	**0.045**	**1.419**	**0.011**
母のみ	**1.558**	**0.008**	0.911	0.437
なし(ref.)	1.000		1.000	
年代				
1708-1759	1.000		1.000	
1760-1799	0.872	0.238	**0.896**	**0.506**
1800-1839	**0.754**	**0.021**	**0.637**	**0.004**
1840-1870	0.823	0.172	**0.628**	**0.004**
Log-likelihood	-2147.8			-3506.7
Chi-square (d.f.)	364.8 (12)			670.6 (13)
Prob > chi-square	0.000			0.000
Number of observations	8,530			16,606
Number of events	805			1,132
Number of individuals	1,294			2,677

注：太字は統計的に有意

これは、飢饉への反応の違いはあるものの、死亡構造とその要因についても、また離婚、再婚に関しても共通していえることである。男女や出生順位による差異が直系家族システムのなかでの優先順位となって結婚・離婚・再婚のタイミングから、生存の確率にまで影響していることが明らかとなった。この結果は、町場と農村という経済基盤の違いをこえた、この地域特有の家族・人口システムを示唆するのであろうか。システマティックな実証分析によって「東北型」が「再発見」されるかもしれない。早急な結論を出す前に、今後、福島県の史料のみならず、他地域でも同様の分析を試み、結果を積み上げることが必要である。

イベントヒストリー分析には長期間継続する良質なデータの構築と様々な変数の作成が必要である。これには膨大な作業が伴う。しかしそれによって様々な仮説の検証と地域を越えた比較が可能となる。本研究のベースとなった Eurasia Project では、同時代における中国、イタリア、スウェーデン、ベルギ

ーなどのコミュニティーとの体系的比較研究による死亡分析を米国 MIT から出版した(2004 年)。それに続いて、連携研究者の津谷典子を筆頭著者として出生分析を出版した(2010 年)。本科研プロジェクトで進めた結婚分析については、研究代表者が筆頭著者となり、現在シリーズ３冊めの MIT 出版物としてまとめている。人口指標のレベルの比較でなく、構造的仕組みを理解しようとする本研究のアプローチは、日本国内だけでなく、人口・家族の東西二元論を打ち破る可能性を秘めている。また本研究が構築してきた歴史人口学データは、現代データでは語れない詳細度と長期継続性を持つことから、社会科学の様々な仮説検証の場を提供しうるといえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

Kurosu, Satomi 2010 Reproduction in East Asian historical demography: Introduction. *The History of the Family* 15(4) 365-69（査読付）

Hanaki, Nobuyuki and Satomi Kurosu 2010 “Marriage relationships among households in mid-19th century Tama, Japan-socioeconomic homogamy, geographical endogamy and kinship networks” *The History of the Family* 15（3） 333-47（査読付）

Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu 2010 “Family, Household, and Reproduction in Two Northeastern Japanese Villages, 1716-1870” pp.249-285 in Tsuya, Noriko, Wang Feng, George Alter, James Lee et al., *Prudence and Pressure: Reproduction and Human Agency in Europe and Asia, 1700-1900*. Massachusetts: MIT Press.（査読付）

Kurosu, Satomi 2009 “Marriage, Divorce and Remarriage in a Stem Family System: Women in Two Northeastern Japanese Villages, 1716-1870” pp. 327-344 in Fauve-Chamoux, Antoinette et al. (eds.) *House and the Stem Family in Eurasian Perspective*. Bern: Peter Lang. （査読付）

黒須里美 2009「近代移行期における結婚と出生の地域差と階層差---単年史料活用の試み---」統計 特集：歴史と統計 60(7): 27-32.(査読なし)

Kurosu, Satomi 2008 “Filling gaps in Japanese historical demography: Marriage, fertility, and households in nineteenth-century rural Japan” *Sungkyun Journal of East Asian Studies* 18(1): 43-70. (査読付)

Kurosu, Satomi 2007 “Remarriage in a Stem Family System in Early Modern Japan.” *Continuity and Change* 22(3): 429-458. （査読付）

〔学会発表〕（計 18 件）

Kurosu, Satomi “Distribution of land in rural communities in northeastern Japan 1716-1870” Social Science History Association 2010/11/18-21 Chicago, USA

黒須里美・高橋美由紀 「近世郡山周辺における農村と在郷町の死亡構造」日本人口学会 2010/6/12-13 お茶の水女子大学

Kurosu, Satomi, Miyuki Takahashi and Aoi Okada “Widowhood and remarriage in northeastern Japan: Rural-urban comparison” European Social Science History Conference 2008/2/26-3/1 Lisbon, Portugal

〔図書〕（計 2 件）

Kurosu, Satomi, Tommy Bengtsson, Cameron Campbell (eds.) 2010 *Demographic Responses to Economic and Environmental Crises*. Reitaku University. (310pages)

６．研究組織

(1)研究代表者

黒須 里美（KUROSU SATOMI）
麗澤大学・外国語学部・教授
研究者番号：20225296

(2)連携研究者

津谷典子（TSUYA NORIKO）
慶應義塾大学・経済学部・教授
研究者番号：50217379

岡田あおい（OKADA AOI）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：50246005